

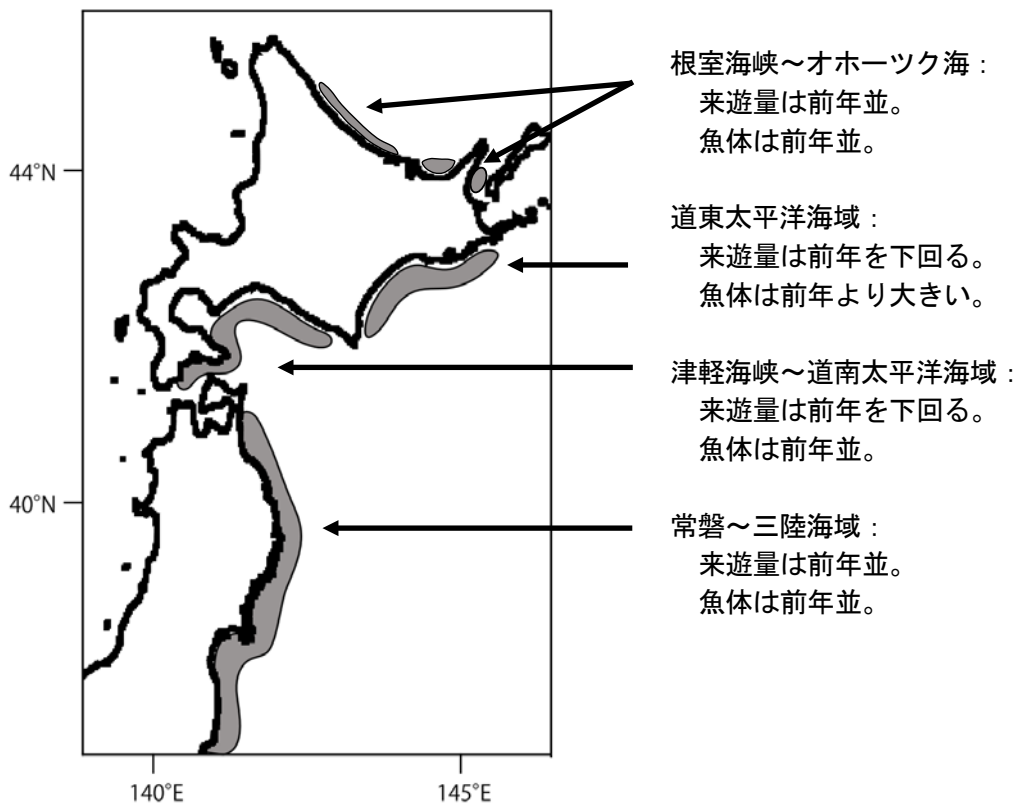


平成29年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し（平成29年10月～12月）のポイント

スルメイカの来遊量は、道東太平洋～津軽海峡では前年を下回り、根室海峡～オホーツク海と常磐～三陸海域では前年並。海域別の予報については以下の通り。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所

担当：業務推進部 島田、塚本

資源管理部 伊藤、岡本

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

平成 29 年度 第 2 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2017年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：主に冬季発生系群（2017年級群）

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：漁場は分散し、漁場形成される期間は短くなる。
- (3) 魚体：前年より大きい。

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網、底びき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：明瞭な主漁期が無いまま終了する。
- (3) 魚体：前年並。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

I 予報の説明

2017年8月～9月に実施した漁場一斉調査（北海道立総合研究機構函館水産試験場、青森県産業技術センター水産総合研究所、岩手県水産技術センター、宮城県水産技術総合センター）と道東太平洋スルメイカ資源調査（北海道立総合研究機構釧路水産試験場）の結果および7月～8月（一部9月を含む）の漁況経過から、10月～12月における来遊量は、道東太平洋海域と津軽海峡～道南太平洋海域では前年を下回り、根室海峡～オホーツク海域と常磐～三陸海域では前年並と予測される。各海域における見通しは以下の通りである。

1. 道東太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東太平洋スルメイカ資源調査によるCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は前年を上回ったものの、前年に引き続き低い水準で推移した。また、道東主要港（十勝港、釧路港、花咲港）における7月～8月の水揚げは皆無だった（表1）。以上のことから、本予報期間における道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測される。近年、道東太平洋海域における漁獲量は11月には大きく減少することから、主漁期は10月で終了すると予測される。また、来遊量が少ないと予測されるため、漁場は分散し、漁場形成される期間は短くなる可能性がある。魚体サイズは、道東太平洋スルメイカ資源調査結果から前年より大きい個体が多くなると考えられる。

2. 根室海峡～オホーツク海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。7月～8月の道東主要港での水揚げは皆無であったことから、同時期の沿岸域への来遊量は前年より少なかったと考えられる。一方で、羅臼港での初水揚げ日（9月8日）は前年より20日早かった（表1）。この要因としては、国後島の太平洋側沿岸域では7月～8月の平均海面水温*が例年より高く、スルメイカが太平洋からオホーツク海に入りやすい環境であったことが考えられる。釧路以東での道東太平洋スルメイカ資源調査によるCPUEは前年を上回ったものの、前年に引き続き低い水準で推移した。以上のことから、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年並と予測される。また、前年同様に、明瞭な主漁期は無いままに終了すると予測される。魚体サイズは、道東太平洋スルメイカ資源調査による釧路以東での結果から前年並になると考えられる。

*気象庁の札幌管区气象台が公表している国後島南東沿岸域の日別海面水温を月平均化した値

3. 津軽海峡～道南太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。津軽海峡周辺海域における漁場一斉調査のCPUEは前年を下回った。函館港での8月の小型いか釣り船CPUE（1日1隻当たり水揚げ量）は前年を上回ったが、浦河港での8月の水揚げ量は前年を大きく下回った（表1）。また、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測される（前述）。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋周辺海域への来遊量は前年を下回ると予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査の結果から前年並になると考えられる。

4. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えら

れる。常磐～三陸海域における漁場一斉調査のCPUEは前年を上回った。青森県白糠以南における7月～8月の小型いか釣り船CPUEは前年並であったことから、常磐～三陸海域に分布する群は前年並と考えられる。道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されるが(前述)、水産研究・教育機構の海況予測システム(FRA-ROMS*)によると、10月も親潮は南偏で推移すると予測されていることから(図1)、常磐～三陸海域へ群が南下しやすい環境であると考えられる。以上のことから、常磐～三陸周辺海域への来遊量は前年並と予測される。前年の漁場一斉調査では同海域で漁獲が無かったため、魚体サイズの比較に8月の入数別水揚げ情報**を利用した結果、本年は前年並の大きさの個体が主体になると考えられる。

*国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム

**漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計

II 調査結果

8月～9月に実施された第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査の結果(図2)、道東太平洋海域(42°N以北、143°E以东)の平均CPUEは0.60尾であり、前年(0.28尾)を上回った(図3)。道東太平洋海域のうち釧路以东では0.50尾であり、前年(0.31尾)を上回った。津軽海峡～道南太平洋周辺海域(41°N以北、143°E以西)では0.74尾であり、前年(4.70尾)を下回った。三陸周辺海域(41°N以南、143°E以西)では0.74尾であり、漁獲が無かった前年を上回った。調査海域全体では0.55尾で、前年(1.47尾)を下回った。

調査船調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、17cmと22cmに山がある双峰型の組成であった(前年はモード19cmの単峰型)(図4)。海域別に見ると、道東太平洋海域ではモード22cmで、前年(20cm)より大型であった。道東太平洋海域のうち釧路以东ではモード22cmで、前年と同値であった。津軽海峡～道南太平洋周辺海域では19cmと21cmに山があり、前年のモード18cmより大型であったが、全体的にはばらつきの大きい分布型であった。三陸海域ではモード17cm(前年は漁獲なし、2015年はモード17cm)であった。

III 各海域の漁況経過

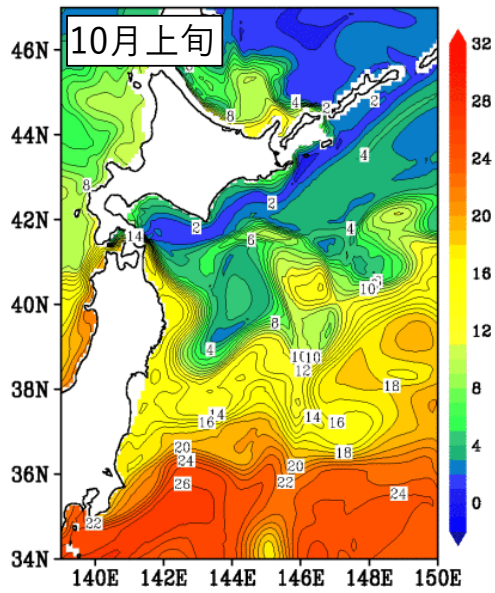
2010年以降の太平洋(根室海峡～オホーツク海を含む)における年間漁獲量(暦年集計)*は10万～16万トンで推移していたが、2015年には7.7万トン、2016年には2.6万トンに減少した(図5)。10月～12月に限定した累計漁獲量は、2010年以降5万～10万トンで推移していたが、2015年に4.0万トン、2016年には0.9万トンに減少した。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域に区分される。

2017年7月～8月の太平洋沿岸域での漁獲量(生鮮:速報値、一部未集計)は4.6千トンで、前年(5.6千トン)並であった。そのうち、常磐～三陸海域での漁獲量は4.1千トンで前年(4.2千トン)並であった(図6)。津軽海峡～道南太平洋海域の漁獲量は0.5千トンで前年(1.2千トン)を下回った。道東太平洋海域、および根室海峡～オホーツク海での漁獲は無かった(前年はそれぞれ0.2千トン、皆無)。千葉県以南の海域での漁獲量は42トンで前年(63トン)を下回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

*主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の漁獲量で引き延ばしているため、図5および図6を含めた漁獲量は全て推定値である。

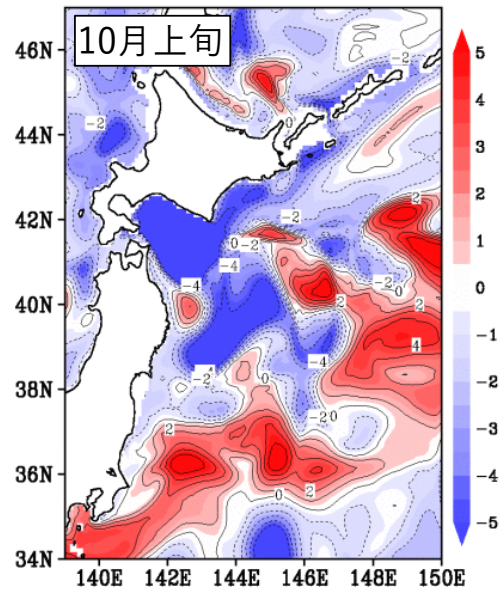
FRA-ROMS

2017/10-early Temperature[°C] (50m)



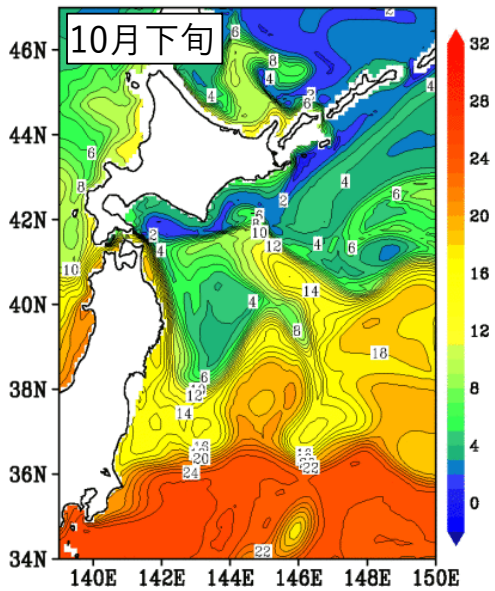
FRA-ROMS

2017/10-early Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)



FRA-ROMS

2017/10-late Temperature[°C] (50m)



FRA-ROMS

2017/10-late Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)

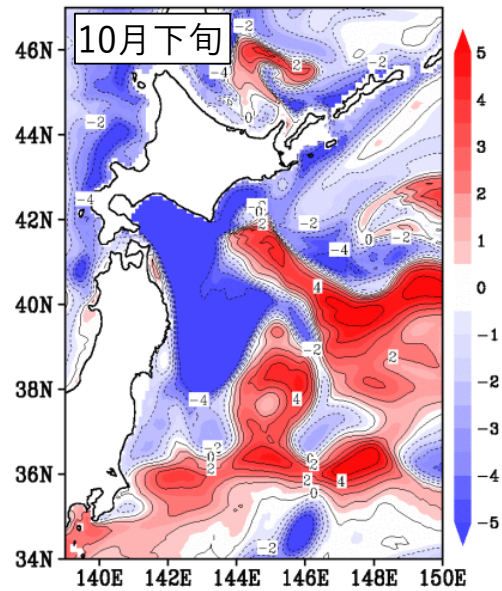


図1. 海況予測システムFRA-ROMSによる2017年10月上旬と下旬の50m深*予測水温（左図）
および平年差（右図）

右図の青色は平年より水温が冷たい海域を示し、赤色は温かい海域を示す

*スルメイカの代表的な分布深度

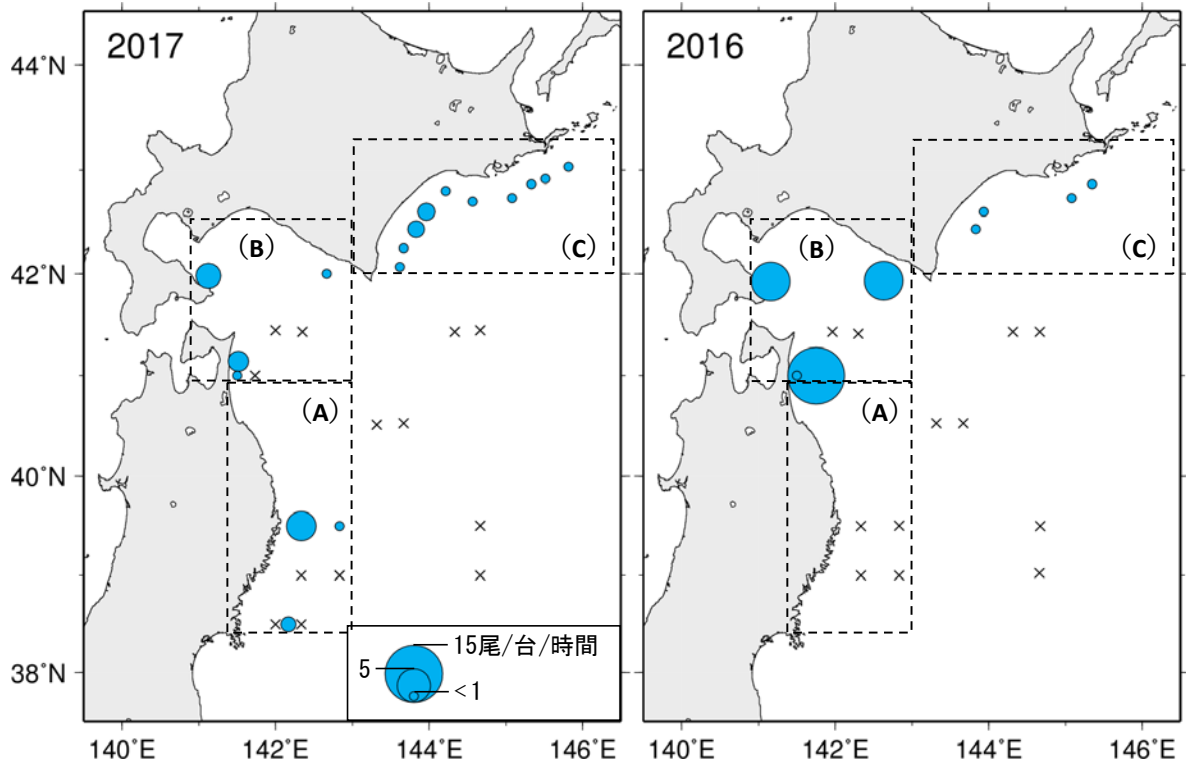


図2. 太平洋第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査の結果
 2017年8月～9月（左図）、2016年8月～9月（右図）のいか釣りによるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を左図右下の凡例にしたがって示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海域における来遊量予測の根拠となった調査海域を示す

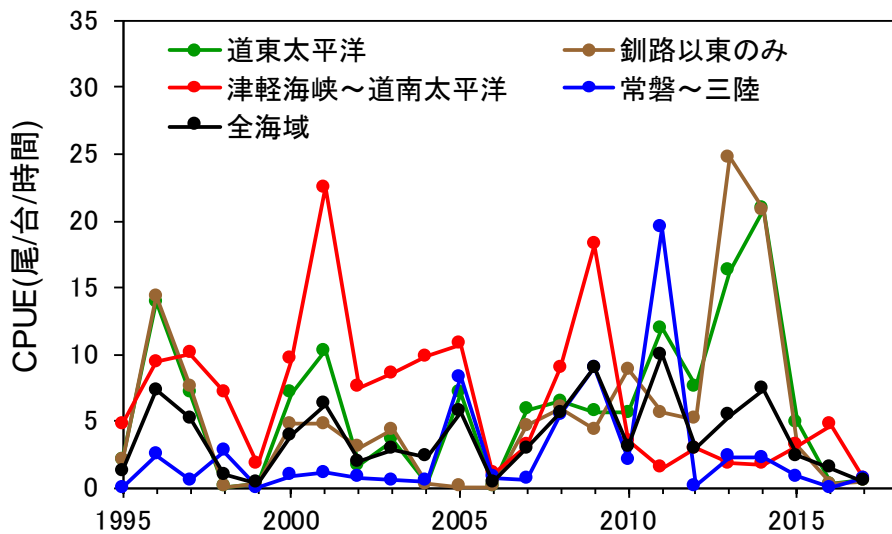


図3. 太平洋第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査による海域別CPUEの年推移

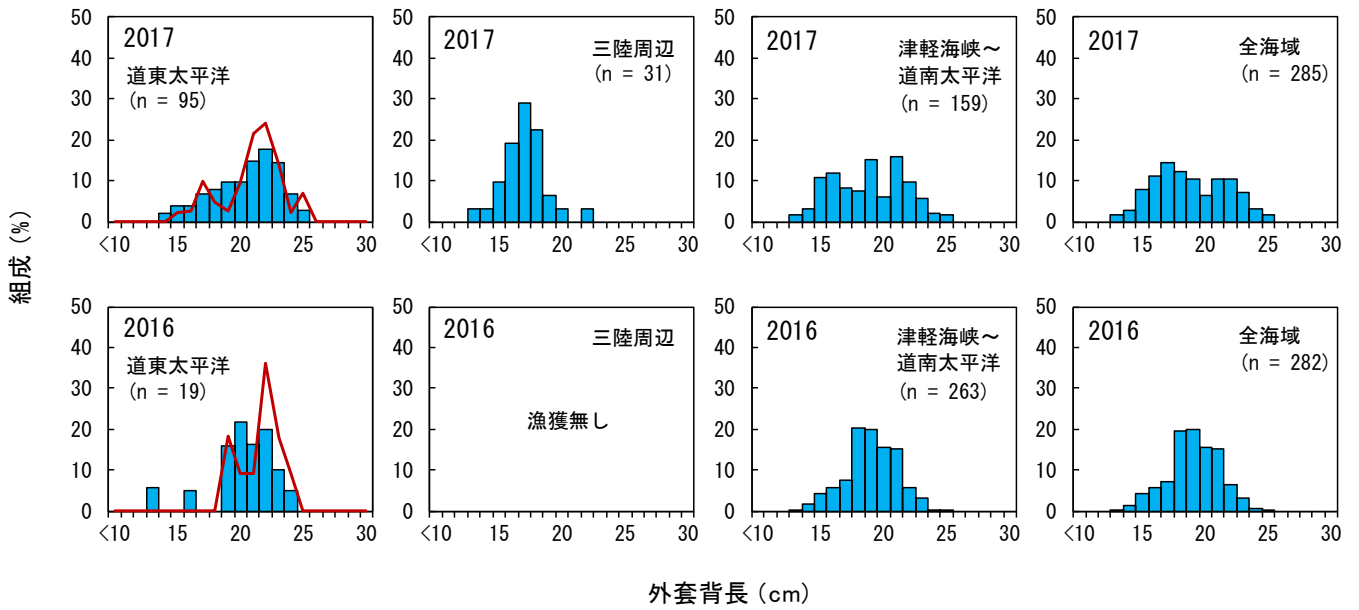


図4. 太平洋第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査による外套背長組成の結果
nは測定尾数を示し、最左図の赤線は道東太平洋海域の釧路以東のみの結果を示す

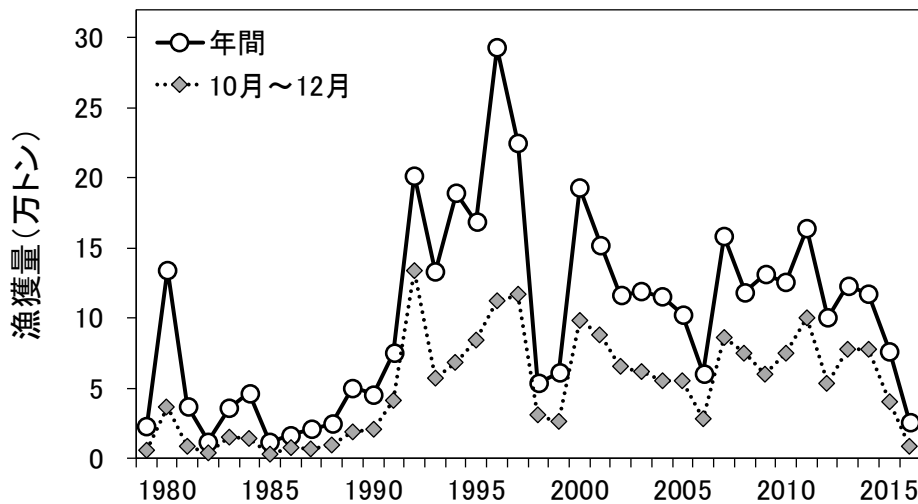


図5. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの年間漁獲量（暦年集計）と10月～12月の累計漁獲量の推移

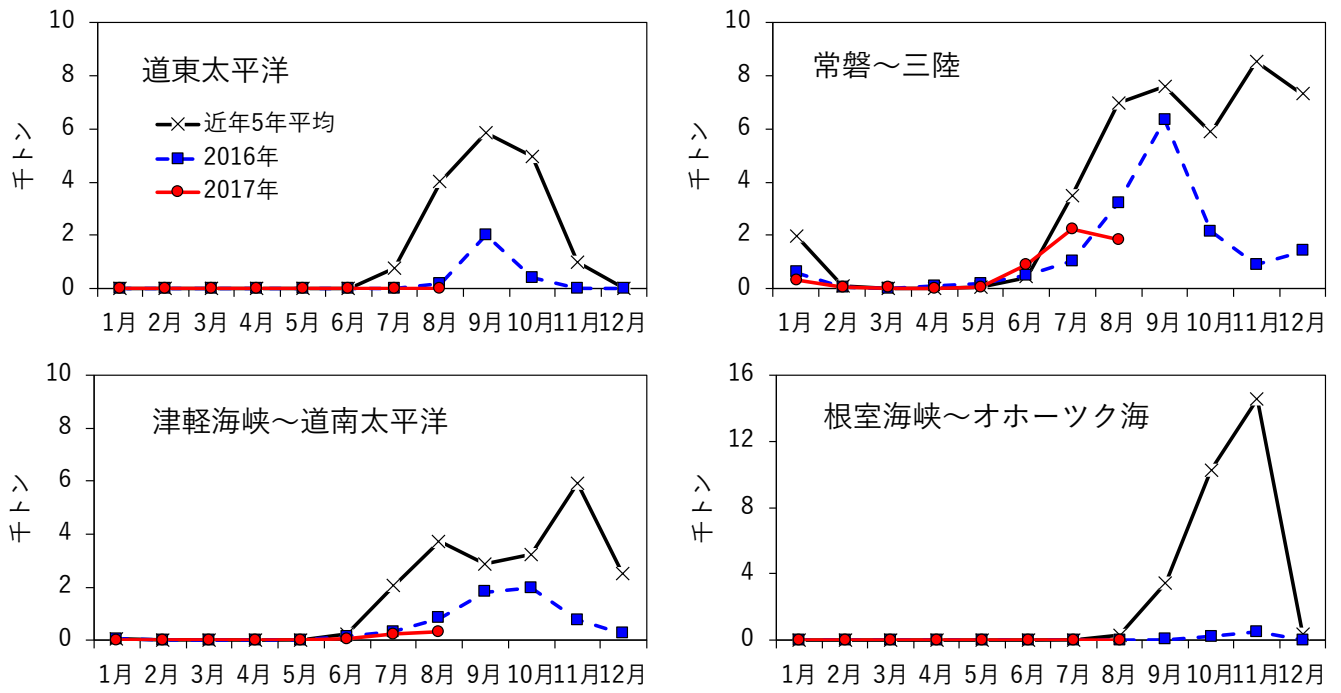


図6. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2011年～2015年の平均
 （釣り・定置網・底びき網・まき網）

表1. 漁況経過 (2017年7月～8月、一部9月・未集計・暫定データ含む)

	漁況経過
北海道 道東	道東主要港（十勝港、釧路港、花咲港）における7月～8月の水揚げは皆無であった。 本年の初水揚げ日は、釧路港で9月2日（前年：8月1日）、羅臼で9月8日（前年：9月28日）であった。
北海道 道南	函館港での釣りによる8月の水揚げ量は180トンで前年比376%、CPUEは前年比320%であった。浦河港での釣りによる8月の水揚げ量は5トンで、前年比2%であった。南茅部での定置網による7月の水揚げ量は23トンで、前年比47%であった。
青森	大畑港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は107トンで前年比103%、CPUEは前年比105%であった。7月～8月の白糠港、八戸港における釣りによる水揚げ量は、それぞれ226トン（前年比136%）、701トン（前年比98%）であった。CPUEは、白糠港では前年比101%、八戸港では71%であった。八戸港へのまき網による7月～8月の水揚げ量は1,971トンで前年比83%であった。
岩手	岩手県主要港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は614トンで前年比153%、CPUEは前年比115%であった。定置網による7月～8月の水揚げ量は171トンで前年比100%であった。
宮城	宮城県主要港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は2トンで前年比28%、CPUEは前年比88%であった。定置網による7月～8月の水揚げ量は23トンで前年比51%であった。
福島	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
茨城	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
千葉	千葉県主要港での釣りによる7月の水揚げ量は7トンで、前年比191%であった。CPUEは前年比84%であった。
神奈川	データ集計中。
静岡	静岡県主要港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は11トンで前年比81%、CPUEは前年比68%であった。
三重	三重県主要港でのまき網による7月～8月の水揚げ量は5トンで、前年比338%であった。定置網による7月の水揚げ量は0.1トンで、前年比63%であった。
和歌山	データ集計中。
高知	高知県主要3港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は9トンで、前年比213%であった。

注：CPUEは1日1隻当たり水揚げ量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 東北区水産研究所 日本海区水産研究所
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	